

# 別紙 1

## 論文の内容の要旨

論文題目 谷崎潤一郎と中国

氏名 西原大輔

本論文は、作家谷崎潤一郎と中国とのかかわりについて、その作品及び伝記の両面から論じるものである。谷崎潤一郎は一九一〇年代から二〇年代にかけて、いわゆる「支那趣味」の小説や随筆を数多く発表した。また、一九一八年と一九二六年の二度にわたって、中国を訪れている。第二回中国旅行では、郭沫若・田漢・歐陽予倩ら中国文学者と知り合い、彼らとの交流は第二次世界大戦後に至るまで続いた。谷崎潤一郎は、生涯にわたって中国と関係を持ち続けた小説家であると言えよう。

「支那趣味」の小説や随筆において、谷崎は中国や中国の風俗物産への憧憬をしばしば語っている。「まるでお伽噺にでもあるような楽しい国土——、こう云う国土に生れたら、自分はどんなに仕合せだったろう」と、小説「鮫人」の南貞吉は言う。また谷崎自身も、一九二七年一月二十七日付土屋計左右宛書簡で、「僕はその支那が——支那趣味が——いよいよ好きになって参ります」と書いている。一見すると、谷崎潤一郎という近代日本の文学者は、中国に憧れ、中国を賛美し、中国の前に跪く、徹底した中国崇拜者であるかのように映る。ところが、中国に対する谷崎の視点をよくよく検討すると、そこには顕著な偏りが見られる。中国を語るキーワードとなっているのは、「お伽噺のような」「夢のような」「怪しい」「不可思議な」「奇妙な」

「絵のような」といった一連の語彙である。

エキゾチックな美の国への礼讃と、アジアに対する偏見との奇妙な組み合わせから成り立っている谷崎潤一郎の「支那趣味」を解説する鍵は、エドワード・サードのオリエンタリズム論にある。植民地及びこれに類する地域の文化に対して、エキゾティシズムの視線を向け、同時に差別的に表象するというオリエンタリズムの構図は、谷崎の「支那趣味」作品にも当てはまる。

本論文の「序」では、まずオリエンタリズムの定義を再確認し、次いで第一章「「支那趣味」の誕生」において、当時の時代背景を明らかにした。そもそも「支那趣味」という用語は、一九二二年一月号の雑誌『中央公論』をきっかけとして広まった言葉であり、比較的新しい造語であった。また、大正時代に「支那趣味」が盛んになった理由として、近代中国におけるツーリズムの発達が挙げられる。さらに、当時の日本の文壇では、南蛮趣味・江戸趣味といったエキゾティシズムの連鎖を見ることができ、これが谷崎潤一郎の「支那趣味」作品を誕生させる文学的背景となったのである。

一方、谷崎潤一郎自身の側では、幼い頃より独特の中国文化体験を持っていた。第二章「文壇に出るまで」においては、谷崎が作家としての自己を確立するにいたるまでの中国とのかかわりを検討した。幼少時代、当時の東京にはまだ珍しかった中華料理屋の草分けである偕楽園を遊び場としていた谷崎は、食べ物を通じて中国文化を知るといふ、極めて貴重な経験を有していた。小学校時分から漢詩文に親しむ一面もあったが、森鷗外や夏目漱石といった前の世代と比べ、漢文学の知識は乏しい。このような点が、旧来の漢学の権威を離れた新たな視点で中国を理解するようになる遠因となった。

谷崎潤一郎はオリエンタリズムの言説を、永井荷風を通じて受容していった（第三章「オリエンタリズムの受容」）。『あめりか物語』『ふらんす物語』において、西洋中心の価値観を反復した新帰朝者永井荷風に、若い谷崎は強い憧れを抱いていた。しかし谷崎は、生涯一度も欧米に渡ったことがなく、「若し日本人としてエキゾチックな芸術を開拓するつもりなら、支那や印度に眼をつけた方がいゝなどゝ思って居た」（「独探」）のである。

第四章「印度趣味・支那趣味の言説を読む」では、インド及び中国を舞台とする一連の異国趣味作品を、サイドのオリエンタリズム論を援用しつつ分析した。一九一七年、谷崎潤一郎は「ラホールより」「ハッサン・カンの妖術」「玄奘三蔵」という三篇の印度趣味作品を発表している。「ラホールより」では、イギリス人学者の著作を利用しつつ、インドを「日常不用意の

間に目堵する市井の一些事が、そのまゝアラビア夜話の一節にも比す可き物語なる事を発見」できる、奇妙で不可思議な国として描き出した。「ハッサン・カンの妖術」においても、インドでは「科学の力で道破することの出来ないような神秘的出来事が、未だに殆ど毎日のように起って居」とされる。「玄奘三蔵」では、谷崎はイギリス人オリエントリスト（東洋学者）オーマンの文献に大きく依存している。谷崎潤一郎の印度趣味は、まさに西洋オリエントリズムを受容することによって成立しているのである。

「支那趣味」の代表的な小説「鶴唳」においても、中国は夢と幻想の国として描かれる。小説「西湖の月」「鮫人」「天鷲絨の夢」などの作品で、谷崎は中国を自由奔放なエキゾティシズムの舞台とし、さらに「陰翳礼讃」で彼は、「現に支那や印度の田舎へ行けば、お釈迦様や孔子様の時代とあまり変わらない生活をしている」と考えている。アジアの後進国では人々は進歩から取り残され、古代さながらの、完全に文明国とは隔絶した暮らしをしているとみなしていた。谷崎潤一郎の中国観の特徴を一言で要約するとすれば、それは静止性または不変性ということになるだろう。「上海交遊記」でも、中国の「田舎へ行けば支那の百姓は今でも呑気に、「帝力我に於いて何か有らん哉」で、政治や外交に頓着なく、安い物を喰い安い物を着て満足しながら、悠々と暮らしている」という中国認識を示している。谷崎潤一郎の「支那趣味」において、日本はオリエントリズムの主体の側に立っている。

谷崎潤一郎の「支那趣味」の創作の源泉となったのは、一九一八年に行われた、約三カ月に及ぶ第一回中国旅行であった。朝鮮半島から満洲を経て北京に入り鉄道で南下、長江を船で下って上海から帰国したこの大陸漫遊からは、数多くの作品が生まれている。随筆等としては、「支那旅行」「朝鮮雜観」「奉天時代の李太郎氏」「支那の料理」「支那劇を観る記」「廬山日記」「蘇州紀行前書」「蘇州紀行」など、小説に「或る漂泊者の倂」「秦淮の夜」「鮫人」「天鷲絨の夢」「蘇東坡」がある。第五章「第一回中国旅行」では、従来詳細が不明だったこの旅行に関し、当時の旅行ガイドブックや時刻表、さらには友人らの証言をも利用して徹底した考証を行い、その全貌を明らかにした。また同時に、紀行文などに見られるオリエントリズムの言説について論じた。

続く第六章「第二回中国旅行」では、一九二六年の第二回中国旅行に関して、中国側の資料等も活用し、考証を加えた。上海のみの滞在となったこの中国訪問において、谷崎潤一郎は知人の紹介を通じて内山書店の内山完造に

出会う。内山完造のはからいで、この著名な日本人作家と中国文学者との「顔つなぎの会」が催され、日本文学研究者謝六逸、劇作家田漢、演劇家歐陽予倩、作家郭沫若らと出会った。また上海の文化人の主催で、おおがかりな「文芸消寒会」が開かれ、谷崎は多彩な分野で活躍していた中国人との出会いを経験する。谷崎の旅行記「上海見聞録」「上海交遊記」のほか、本論文では、新たに中国語紙『申報』の記事類に注目し、新事実の発掘及び分析を行った。

第二回中国旅行中の最も重要な出来事は、一品香ホテルで行われた谷崎と郭沫若・田漢両氏との対話である。「田舎へ行けば支那の百姓は今でも呑気に、「帝力我に於いて何か有らん哉」で、政治や外交に頓着なく、安い物を喰い安い物を着て満足しながら、悠々と暮らしている」という、オリエンタリズム的価値観を語った谷崎潤一郎に対し、二人の中国の知識人は、現代中国の困難な社会状況を真剣に訴えた。この対話によって、谷崎のオリエンタリズム的中国認識が問い直され、以後谷崎潤一郎は「支那趣味」の創作から離れていくことになったと考えられる。

第二回中国旅行以降の谷崎は、中国熱から醒めてしまったように見える。しかしながら、上海で知り合った田漢・郭沫若・欧陽予倩との交友は続いた。第七章「中国文学者との交流」では、様々な資料を用いて、その後の三人とのかかわりを検証した。また、一九四二年に発表された随筆「きのうきょう」で、谷崎は同時代の中国現代文学の諸作品を批評しているが、この点についても分析を行った。

大正年間を中心とした時期に谷崎潤一郎が生み出した「支那趣味」には、オリエンタリズムの言説がちりばめられている。しかし、一九二六年に中国文学者との対話を通じ、オリエンタリズム的中国観の修正を迫られたこの日本人作家は、中国を舞台としたエキゾティシズムに立ち戻ることはなかった。最終章の「結語」では、随筆「翻訳小説二つ三つ」に注目した。ここで谷崎は、長年中国大陸に暮らしたアメリカ人パール・バックの長編小説『大地』の、「ありのまま」の中国描写を評価し、返す刀で、日本の中国関連の著作について、「へんに猟奇的な風俗異聞を集めたような、猥褻が多かったものが多い」と批判する。谷崎潤一郎にとって、現代中国はもはや気ままな空想を展開するにふさわしい幻想のオリエントではなく、作家自身が属する現実世界の一部となっていたと言える。